

令和4年1月26日

南の風 2021 ウィンターカップ考察V

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

福大大濠のオフェンスについてです。

特徴として、スターターの選手に高さがあることが挙げられます。8番川島選手（200 cm 1年）、14番湧川選手（193 cm 2年）、15番副島選手（196 cm 2年）、7番泉選手（189 cm 3年）、そしてチームの司令塔であり大黒柱、13番岩下選手（180 cm 3年）といった布陣です。スターターの平均身長は191.6 cmになります。高校生でしかも留学生がいないにもかかわらず、そして身長が高い順に3人が下級生なのも驚きです。

さらに3人とも身長を生かした中のプレー（ポスト）だけでなく、ドライブやボール運び、トランジション時のランナーとしての役割もできる機動力も備えているのです。

福大大濠のハーフコートのオフェンスは、5アウトのドリブルドライブモーションをメインにしています。サイズのある湧川選手や川島選手が果敢にペイントドライブを仕掛け、そのままシュートに行ったり、コネ選手がヘルプに来れば外の岩下選手や泉選手にキックアウトしたりする戦術でした。

エントリーとして副島選手のハイピックやドラッグスクリーンを利用して、ペイントにドライブすることもありました。大黒柱は何と言っても岩下選手なのですが、やたらと3Pシュートを打つというのではなく、基本的に中を突いて外にボールを出すことを徹底していました。準決勝では、岩下選手の3Pシュートが爆発（9本沈めて27点）したのですが、湧川選手の24点（ドライブやリバウンドシュート）も見逃してはいけな活躍でした。

また、川島選手（200 cm、16才）は決勝という舞台でも、積極的にペイントドライブをおこなったり、空けば3Pシュートにも挑戦したりしました。将来が楽しみな選手の一人です。

このように福大大濠は、ドリブルドライブモーションを中心にオフェンスを組み立て、一人ひとりが積極的にシュートに行くことができる、たいへんバランスのよい攻めをしていました。そして3Pシュートのスペシャリストである岩下選手という絶対的な核が、チームを支えている印象でした。

最後に、今回のウィンターカップ男子のゲームを観ての感想です。

トランジションからの速い展開からアウトナンバーをつくり、速攻、アーリーオフェンスで攻める形を得意とするチームがかなりありました。代表的なチームは福岡第一（ベスト4）や、県立小林（ベスト8）です。両チームともシュート力が際立っていました。また3Pをオフェンスの中心に据えて戦うチームも増えました。PGやSGだけでなく、PFやCクラスであっても、3Pシュートを打つ選手が増えている印象でした。代表的なチームは、仙台大明成と福大大濠でした。

U18から、全員が3Pシュートを打てることは、世界と伍していくために重要な戦略だと思います。

ただし気になったのは、3Pシュートを打つタイミングです。ボール運びからエントリーして、すぐ打ったり、外のボール回しだけで打ってしまったりして、ブロックに掛かってしまう場面をかなり見ました。3Pシュートを打つこと自体は問題ないのですが、やはり中を突いて外へのキックアウト、エキストラパス、あるいはスクリーンでズレを作って打つ方がよいのではと感じました。

男子も、それぞれの高校の特長がよく表れたウィンターカップでした。